

[論文]

トーマス・F・トーランスにおける説教

原 田 浩 司

目次

はじめに

- 1 トーランスの説教
 - 1.1 トーランスと「説教集」
 - 1.2 「あなたは新しく生まれなければならない」
- 2 トーランスの説教論 —『今日においてキリストを説教すること』（1994年）をめぐって
 - 2.1 ケリュグマとディダケー
 - 2.2 イエスにおける人性と神性
 - 2.3 イエス・キリストの十字架
- 3 トーランスにおける説教
 - 3.1 キリストへの集中 —何を語るか
 - 3.2 福音の説教 —いかに語るか
- 4 まとめ
 - 4.1 トーランスの危機意識
 - 4.2 「教会への緊急要請」

はじめに

20世紀のスコットランドの神学界を代表するひとり、トーマス・F・トーランス（Thomas Forsyth Torrance: 1913-2007）[※以下「トーランス」と略す]のことが日本で論じられるのは「科学」の文字が頻繁に用いられる文脈かもしれない¹。しかし、それはトーランス神学の特徴の一面であり、トーランスが扱う神学の領域は、三位一体論やキリスト論などの

¹ 京都大学の芦名定道らの研究はおもに「宗教と科学」の関係論の側面からトーランスの神学を考察する。1980年に日本で訳出された彼の著書『科学としての神学の基礎』（水垣渉・芦名定道共訳、教文館）の原著タイトル（“*The Ground and Grammar of Theology*”）には「科学（Science）」の文字はないが、本書の内容は、物事を二元論的に処理するいわば「疑似科学」を批判し、「統一論的な科学的方法論」こそ、神学の根底にある方法論であるという点を論じたもので、邦訳書のタイトル「科学としての神学」の表現は実には的確で、インパクトのある題である。また、最近2011年9月に翻訳出版された彼の著書『キリストの仲保』（原題：*Meditation of Christ*、芳賀力、岩本龍弘訳〔2011年、キリスト新聞社〕）でも、トーランスは「科学的神学の提唱者」として紹介されている。

神論を中心として、広範かつ多岐にわたる。彼は実践神学の領域に関連する書物を幾つも出版しているものの、これまで日本でそれらが注目され、認知される機会はあまりなかったと言えよう²。

「説教」に関しては、トーランスは40歳代に自身の説教集を二冊出版し、その両書の出版の間にも、16世紀スコットランド宗教改革の第二世代の指導者の一人として活躍したロバート・ブルース (Robert Bruce: 1554?-1631) が1590年に出版した説教集『主の晩餐の秘義 (*The Mystery of the Lord's Supper*)』を現代英語に訳し、1958年に出版している。つまり、彼がエジンバラ大学の新進気鋭の神学者として台頭し始めた1950年代後半に、説教をめぐる書物が相次いで出版されている。また、彼は大学での教義学教授を退官後も、説教についての論考を執筆している。

本稿の目的は、トーランスの神学を、実践神学の領域、特に「説教」の観点から考察し、彼自身が記した素材を紹介しつつ、トーランスの「説教論」を呈示することである。

1 トーランスの説教

1.1 トーランスと「説教集」

トーランスは1957年に『キリストの到来と再臨の時 (*When Christ Comes and Comes Again*)』を、そして1959年に『今日における黙示録 (*The Apocalypse Today*)』を出版した。トーランスがエジンバラ大学の神学教師に就任したのが1950年であり、両書ともトーランスが牧師の務めを退いてから数年後のものである。前者には、教会で語られた説教の他、大学のチャペルやラジオ放送等の機会に語られた全16篇の説教が収められている。他方、後者には、第二次世界大戦中と戦後の時期に、トーランスが牧師をしていたバロニー教会 (アリス) とビーチグループ教会 (アバディーン) で説教壇から語った説教が収められている。1940年にトーランスはこれまでエジンバラ大学とオックスフォード大学で続けてきた学びを一旦終え、スコットランド教会 (Church of Scotland) の牧師として仕える志を固め、そこでビーチグループ教会が彼の招聘に名乗りを上げたという経緯がある。ここで

² 例えば、1955年に出版した“*Royal Priesthood: A Theology of Ordained ministry*”は、スコットランド教会とイングランド教会とのエキュメニカルな協調関係を模索しつつ、教会がなすべきつとめ (ミニストリー) の本性について論じた書物である。そして1960年に出版した“*Conflict and Agreement in the Church: The Ministry and The Sacrament of the Gospel*”は、教会のつとめの理解や聖餐理解などについて、諸教派間に不一致がある中で、エキュメニカルな立場から、違いを乗り越えて一致できる、または一致すべき本質をめぐって論じた意欲作である。これらも、実践的な観点から彼自身の神学思想を論じたものであるが、こうした著作が日本で取り上げられる機会はなかった。最近日本で論じられたものとしては、神代真砂実が「『実体的現臨』をめぐって」(神学69, 2007年)の中で、トーランスの聖餐論を紹介している。

興味深いのは、牧師としての最終的な招聘を受けるために彼がビーチグループ教会で、ヨハネによる福音書 2:23-3:15 のテキストに即して語った、所謂「お見合い説教」も前者の説教集に収められている点だ³。この説教集の出版に際し、トーランスは実際に語った説教原稿に加筆し、より神学的な要素を加えた読み物として発展させている⁴。そのため、収録されている説教は 1940 年当時に語られたオリジナル原稿そのものではない。しかし、青年トーランスが一牧師候補者として語った説教の骨子と要点は保持されていると思われる⁵。しかも、この説教が語られた当時は、イギリスとナチス・ドイツとの間で武力衝突が始まっており、戦時下の混沌とした状況にあった。そこで、一つの事例として、無牧となっていた教会の信徒たちに向けてトーランスが語った「エポック・メイキング」と言えるこの最初期の説教に着目する。

1.2 「あなたは新しく生まれなければならない」(ヨハネ 3:7)

ヨハネ 3 章のテキストは、イエスとニコデモとの対話から成る箇所である。この中でイエスが教える「新しく生まれる」ことについて、ニコデモが理解できずに何度も問い直す状況について、トーランスは神学者たちの印象深い言葉を上げながら、次のように述べる：

かつてマーチン・ルターは、人がはじめて福音に直面する時、その人はまさに新しいゲートに連れて行かれる子牛に似ている、と言いました。P.T. フォーサイスは、たとえどんなに福音が素直に宣言されても、「嗚呼、あまりにも神学的なので、私には理解できない」と言って、背を向けて立ち去っていく人たちがいつもいる、とよく言っていました。ですが、その難しさとは、いつの時代も、知的な難しさではまったくありません。なぜなら、子どものようになればなるほど、ますます容易に理解できるようになるからです。その難しさとは、福音は私たち自身の概念や考え方と矛盾するほど、あまりにも斬新であり、かつ異質であるため、悔い改めと精神の変革がなければ把握しえない難しさなのです⁶。

³ Alister McGrath, *T.F. Torrance: An Intellectual Biography* (T&T CLARK, 1999), p. 62 と T.F. Torrance, *When Christ Comes and Comes Again*, pp. 61-75 を合わせて参照。なお、トーランスがオックスフォードでの学びを止めて牧師になる召命を確信したきっかけとして、当時既に第二次世界大戦がはじまっており、スコットランド教会からも幾人もの牧師たちが「従軍牧師」として軍隊に召喚され、その結果スコットランドには幾つもの無牧教会が存在していた状況があった点を、マクグラスは指摘する。

⁴ Torrance, *When Christ Comes and Comes Again*, p. 7.

⁵ McGrath, op. cit., pp. 63-65 を参照。ここにはトーランスが 1940 年に実際に語った三篇の説教からそれぞれ一部分ずつ抜粋されており、その当時の説教の中心的なメッセージをマクグラスは提供している。それらを見る限り、1957 年の出版に際して、1940 年当時の説教内容や骨子が大幅に加筆修正されたとは思われない根拠を十分に見てとれるだろう。

⁶ Torrance, op. cit., p. 63.

トーランスは、テキストのニコデモと説教の聴き手の会衆を重ね合わせる。そして会衆がしばしば直面する「教え（説教）の難しさ」は、聴き手の側の知力によるものではなく、誰もが直面することであり、そのような時に大切なのは、教えを聴くまさにその時、御言葉によって、聖霊の力によって「上から (from above)」新たにされることである。そして、イエスがニコデモに語る言葉を、会衆に分かりやすい言葉に言い換えて、トーランスは語りかける：

ニコデモよ、あなたがもうすでに知っていたり、考えついたりするような観点から、それらのことを解釈しようとしても、とうてい理解することはできない。それらは上から来るのであり、またそれゆえに、あなたは下から理解することができず、あなた自身の上からしか理解することはできない。それらのことが分かるのは、天から来る者、天からくだる者だけである。これら霊的なことをあなたに告げることができるのは、まさにそのような者であり、もしあなたがそれらを理解するとすれば、新しく生まれなければ、上から生まれ変わらなければならない⁷。

こうして、トーランスは教えの語り手として、イエスとニコデモの会話の中に入って行く。そして「新しく生まれる」ことには、徹底して「上から」下へ、「天から」地へという不可逆的な垂直の方向性があることを強調する。まさにこれこそが人間の救いにとって不可欠な方向性であり、人間の側の力によるものでは一切なく、「上から」の一方的な神の恵みの御業によることを、会衆に思い起こさせる。

さらに、5節でイエスが語る「水と霊とによって生まれる」ことについて、トーランスはそのテキストの文脈に即して「洗礼」へと話を展開する：

イエスが洗礼について言及していることは疑いようがありませんが、それはただ水による洗礼のことだけでなく、その外的なしるしであり、証印である水によって執行される場所の、比類なき聖霊による洗礼について言及しているのです。キリスト教の洗礼における水は、キリストと共にある死と復活を指し示し、キリストの霊の力によって、罪に対する死と、命に至る復活を通してもたらされる新生を指示しています⁸。

トーランスはさらに、イエスの十字架の贖罪と新生について語る：

罪の力を打ち破るために、そして、私たちに自由を得させるために死んでくださった偉大な医者であられるイエス・キリストだけが、私たちに救いの癒しをもたらすことができます。彼は、十字架の力を通して、拭い去ることのできない烙印として私たち

⁷ Ibid., p. 64.

⁸ Ibid., p. 67.

に刻まれている背きと罪、しかも紛れもなく私たちの存在の根元を墮落させる背きと罪を、実例に即しながら過去にまで遡って、その全てを帳消しにすることができます。さらに、そればかりか、彼は私たちの過去の命を、もう一度、彼自身の御手の内で摘み集めることができ、そして罪が貪る年月を取り戻し、それらを私たちの癒しと贖いのために用いることができるのです。さらに、私たちが自らの人生を無駄に費やし、私たちの生活が腐敗し、まさに地面に崩れ落ちているような時でさえも、彼はこの命を、絶望と墮落、そして腐敗の墓穴から、もう一度甦らせ、その命を永遠に至るものへと新しくすることができるのです。イエス・キリストが、御自身の死と復活の力によって、私たちに与えてくださるこの新しい命は、日ごとに、私たちの身体的で自然的な経験に衝撃をもたらさないはずがありません。…（中略）… 新生は霊的な起源によるものです。それは、処女降誕によって、自然を超越した上から、魂の内にもたらされます。古代人からの進化によってではなく、私たちの魂の内、突如として働いて、上から魂を打ち開き、イエス・キリストにおける新しい本性を私たちに授けてくださる神の霊の行為によって、もたらされるのです。…（中略）… 私たちは、上から、非自然的な力で、神の恵みの奇跡によって、もう一度生まれる必要があります。しかし、これは私たちにとって非常に受け入れ難いことです。… 私たちは自らの霊的な誕生に貢献することは何もできません。私たちは、ただ生み出されることによってしか、新しく生まれることはできません⁹。

トーランスはここで、新生は「私たちが」ではなく「キリストが」十字架の死をもって人間の罪を贖い、そして「上から」、神の霊の行為によってもたらされる一方的な恵みである点を実に印象深く会衆に語りかけている。

そして、説教は再びニコデモの話しに戻る：

私たちが新しい人格となることができるのは、ただ神の恵みによるものです。このことが私たちに示されているポイントであることは、はっきりしています。ニコデモはこれに混乱しました。ファリサイ派の一人として、ニコデモは、その当時のタルソのサウルと同じように、神の御心を遂行し、神の律法の命令に従っていくことに自分の人生のすべてを費やし、心の底から宗教的な人物でした。そして、彼もまた自分自身の善と義に依り頼むようになっていました。妨げとなっていたのは、イエスの目の前で問われていること全てでした。もし新たに生まれなければ人は御国に入ることがで

⁹ Ibid., pp. 68-69.

きないならば、彼の善と義の一切が空しいものになってしまう。そのことは、イエスについて、いつも困惑させられることでした；人がたとえどんなに宗教的であろうとも、たとえどんなに善人であろうとも、イエスの立場は絶えず、その人に対して、心の内において、その人が罪人であり、その点において他の人と何も変わらず、精神の変革と新しい本性をひどく必要としているという点を見出しました¹⁰。

そして、この説教の最後は、「新しく生まれた」人間の例として使徒パウロを引き合いにして、閉じられる：

ニコデモは心底から宗教的な人物だったのですが、新しく生まれる必要性和上から生まれる必要性をイエスがとても強調して語られたことは、紛れもなく彼に対して語られたものだった点を、もう一度思い起こしていただきたい。ニコデモよりも私たちがもっとよく知っている別のファリサイ派の人物がいました。それは、自分の生き方の全体を変え、著しい回心を遂げ、新しく生まれ、キリストにおいて洗礼を受け、そうしてパウロという新しい名前で知られるようになった、タルソ出身のサウルです。けれども、パウロは新しく生まれることや心理学的な経験としての回心について一言も語らず、最初から最後まで彼は「キリストに結ばれて新しくされた者」と言いました。なぜなら、わたしたちが新しい創造の新しい命を分かち合えるのは、まさにキリストに結ばれることにおいてだからです。イエスがニコデモに教えたことについて、私たちが非の打ちどころのない格好の例を見出すのは使徒パウロにおいてであり、また、「私がキリストに倣うように、あなたがたも私に倣いなさい」と言ったのは、まさしく使徒パウロでした。あなたがたは—上から (*from above*)—生まれなければならないことに、驚くことはありません¹¹。

トランスは、このようにイエスとニコデモの対話を通し、イエス・キリストの受肉から十字架、そして復活という出来事に触れながら、「新しく生まれる」のは「上から」の一方的な神の恵みによることを、会衆に繰り返し重ねて語りかける。

トランスの説教は、説教者自身が、時に、イエスの言葉を言い換えて、自ら「ニコデモよ」と呼びかけるようにしてイエスとニコデモの会話の中に入っていき、そのことを通して、説教者が語りかけている会衆も共にこの会話の中に入れられ、ニコデモの立場と会衆の立場を重ね合わせて語りかけるなどの修辞法も用い、そして全体的に、教理的に非常に整った説教が語られている。後に加筆修正されたとは言え、牧師候補者として最初期に

¹⁰ Ibid., pp. 89-70.

¹¹ Ibid., p. 75.

語られた説教の骨子と要点において、完成度は非常に高いものである。

2 トーランスの説教論 —「今日においてキリストを説教すること」 (1994年)をめぐって

次にトーランスの「説教論」について考察する。その対象とするのはトーランスが1994年に出版した、全体で30頁から成る小冊子『今日においてキリストを説教すること (Preaching Christ Today)』¹²である。ここでは、その中で示された、説教をめぐる論考の要点を明らかにし、トーランス自身の主張の特徴を見極めていく。

2.1 ケリュグマとディダケー

トーランスは「キリストを説教すること」という主題をめぐって、おもに3つのポイントを指摘する。一つ目が「ケリュグマ (宣教) とディダケー (教え) の相互関連」である。トーランスはこう述べる：

キリストを説教することは、伝道的な活動であり、かつ神学的な活動でもある。なぜなら、それは、キリストが実際に私たちに聖書において呈示してくださっているようなキリストの宣教であり、またキリストを教えることだからである。新約聖書の用語において、キリストを説教することには「ケリュグマ」と「ディダケー」が含まれている。つまり、キリストを説教するというのは宣教的な活動であり、かつ教示的な活動でもある。

教会の召命は、宣教的に (kerygmatically)、かつ教示的に (didactically) キリストを宣べ伝えることである¹³。

このように、トーランスはケリュグマとディダケーの一体性、および両者の相互関連を強調する。しかし、この点を強調する背後には、ブルトマン以後、「歴史科学的方法 (historical scientific method)」の名のもとに、聖書学がケリュグマとディダケーの関係を切り裂く方向へと進んできたことに対する強い危機意識がある。それゆえ「あなたが聖書におけるこれらの要素、すなわち教示的なものから宣教的なものを引き離し、神学的なものから歴史的なものを引き離そうとする時、あらゆることが誤った方向へ進んでいく」¹⁴と警鐘を鳴らし、「歴史科学的方法」が引き起こしてきた問題点を指摘する。それは、第一に、

¹² これは当時スコットランド内の全ての教派の牧師たちにハンドセル財団から無料贈呈された非売品のパンフレットであり、現在では入手しづらい資料である。トーランスが危機意識を抱きながら説教について論じた貴重なものである。

¹³ Torrance, *Preaching Christ Today*, p. 1.

¹⁴ *Ibid.*, p. 2.

聖書学者たちの言う「歴史」とは、整然とした因果律から解釈される「Historie (歴史)」と、人にとって物事がいかにして現象として立ち現われるかという観点から解釈される「Geschichte (歴史)」に鋭く二極化する二元論へと導くこと、第二に、科学とは本来、統合的なものであるにもかかわらず、彼らの言う「科学」とは、経験的要素と理論的要素を分離し、または物理的事象と数学を二元論的に分離する、アインシュタインによってすでに覆された「疑似科学」であること、そして第三に、この「疑似科学的方法」によってケリュグマとディダケーを引き裂き、さらには、聖書の全体性をも見失わせていることである¹⁵。そして、これらの問題点を抱えた聖書学の成果は、説教を福音的に語る障害になっている点を批判して、次のように述べる：

実際の歴史上のイエスは、その救いの御業から切り離すことなどできないキリストである。なぜなら、彼の人格も業も一つだからであり、救いの恵みという自身の福音をキリストは身にまとっているからである¹⁶。

福音の甚だしい誤解と、教会の信仰に対する重大な損害を抜きにして、歴史的イエスと神学的キリストとが別々に切り離されることなどありえない。…ディダケーとケリュグマとの分離を含め、理論的要素と経験的要素を分離させることは、聖書が示すイエス・キリストを台無しにし、破壊し、それが提供するものはどれも皆、神の真理をはぎ取ったキリストの一面にすぎない。そのため、人々はイエス・キリストを説教しづらいと感じている¹⁷。

こうして、疑似科学に基づく方法論によってケリュグマとディダケーを二元論的に分離する聖書学に対し、トーランスは強い警戒心を示すと共に、寧ろそれとは正反対に、両者の一体性と相互連関を重視して、キリストを説教することの重要性を指摘する。

2.2 イエスにおける人性と神性

二つ目のポイントが「イエスの真の人性と神との間の破れざる関係」である。イエスが「真の人であり、真の神である」というカルケドン会議の公式が、キリストを説教することにおいて極めて重要な観点であることを、トーランスはこう指摘する：

¹⁵ Ibid., pp. 4-6. これらの点をめぐる問題意識は、トーランスが1976年に発表した『空間・時間・復活』(小坂宣雄訳, ヨルダン社, 1985年)の序章でも論じられ、さらに1980年に発表した“*The Ground and Grammar of Theology*” (邦訳:『科学としての神学の基礎』, 水垣渉, 芦名定道訳, 教文館, 1990年, 44-63頁)では、この問題点について、歴史的経緯に触れながら、より詳細に論じられている。したがって、トーランスは長きにわたって、聖書学者たちの「イエス研究」の方法論に疑問を持ち続けてきたことが伺える。

¹⁶ Torrance, *Preaching Christ Today*, p. 7.

¹⁷ Ibid., p. 8.

私たちが、福音書において読み取り、キリストとして宣べ伝えるイエスは、イスラエル人であると共に、主なる神である。なぜなら、イエスにおいて、私たちと共にいるために、そして実際に、私たちが救い、わたしたちを癒すために、私たちの一人として、私たち人間の本性、罪と咎、惨めさと死をご自分のものとして引き受け、そのようにして、私たちの神となるために、私たちのための神として、神御自身が来てくださっているからである。私たちは、イエス・キリストがイスラエルの人であり、かつわたしたちの神であるという二つの事実をどのようにして結びつけているだろうか？福音書におけるあらゆることが、この二重の真理に基づいている¹⁸。

イエス・キリストを説教することにおいて、人としてのイエスを強調すればするほど、ますます神としてのイエス、すなわち、全能の主、天と地と見えるものと見えないものの創造者なる神御自身が、イエスにおいて受肉し、そして、人間の弱さと欠けを担い、人間の罪を贖うために、わたしたちと共にいてくださるために人となられたことに思いを馳せる必要がある¹⁹。またその逆も然りで、神としてのイエスを強調する時には、それだけいっそう、真の人としてのイエス、すなわち、ひとり人間として、ポンテオ・ピラトの下で苦しみを受け、人間の罪を贖い、神と人とを和解させるために、十字架の上で死なれたイエスを強調しなければならない。そのように、説教においては、イエスにおける人性と神性の不可分の一体性を保持することが非常に大切であり、またこのことのゆえに、「神と人との唯一の仲保者」としてのイエス・キリストを指し示すことができるのである²⁰。

トーランスはさらに、イエスが受肉した「神の言」である点に着目する必要性を指摘する。彼はロイヒリンが1494年に発表した『*De Verbo Mirifico* (素晴らしい御言葉について)』の中で、「神の言」をめぐる中世の理解に潜む誤謬を指摘した点を再評価し、中でも、ロイヒリンがニカイアの教義に立ち返り、そこから神の言を見つめ直した点を高く評価する：

彼（ロイヒリン）は『*De Verbo Mirifico*』と名付けられた小冊子を出版し、その中で、神の言葉をめぐるヘブライ的概念を詳しく論じ、さらにそれを新約聖書におけるキリストと一つに結びつけた。それから、ニカイア公会議の教義に言及しつつ、彼は次のように論じた。すなわち、イエス・キリストは神の御子であると同時に、神の言であり、それゆえに、福音書においてわたしたちが聴くイエスの言葉を、神と同本質の、

¹⁸ Ibid., p. 9.

¹⁹ Ibid., p. 11.

²⁰ Ibid., p. 14.

または神と同じ実体の、受肉した神の言として考えなければならない。神の内に言葉があることを否定することは、キリストが受肉した神の御子であることを否定することに相当する。こうして、ジョン・ロイヒリンはニカイア公会議の教義から逸脱してきた中世の神学を批判した。ニカイアにおけるホモウーシオス論争をイエスにおいて受肉した神の言をめぐっての理解に適用したことは、人々の聖書理解に多大な影響を及ぼし…さらに、神の言の客観性について、また聖書の権威をめぐる宗教改革の理解において、非常に有意義な役割を果たした²¹。

この点以外にも、トーランスはニカイアの教義に立ち帰ることの意義を繰り返し示し、そこから聖書を解釈し、受肉において真の人となられた「神の言」としてのイエスの言葉に、注意深く傾聴する必要性を説く²²。それと共に、「受肉」の出来事において、イエスの人格における人性と神性の破れざる関係の中で、イエス・キリストを説教することの重要性を指摘する：

もしイエス・キリストが真実に受肉した神であり、また神性と人性が、極めて独特な仕方、彼の一つの人格において不可分に結合しているのであれば、自らの内に一切割り引かれることなく人性と神性を満たしておられるイエス・キリストご自身こそが、教会の使命のまさに中心となる。今日を生きる男性たちや女性たち、そして子どもたちに対してキリストを説教するために、私たちは、イエス・キリストを唯一の主として、またこの世の救い主としてのその揺るぎない特異性と超越性において、宣べ伝えなければならない²³。

2.3 キリストの十字架

三つ目のポイントが「キリストの十字架」である。「キリスト教の福音のまさに中心にあるのが、苦しみを受けるキリストを説教することである」²⁴とトーランスは述べる。神は愛する独り子を世に与え（ヨハネ 3：16）、十字架の出来事を通して、世の罪を取り除く小羊（ヨハネ 1：29）として代償の犠牲となられた。神は十字架において「自分自身を愛する以上に、私たちが愛してください」神であることを啓示する。それゆえに、トーランスは重ねて、福音における十字架の中心的な位置づけを強調すると共に、全ての人の身代わりとなって十字架で死んだイエス・キリストの「身代わりの人間性」を重視する必要性を訴える：

²¹ Ibid., p. 15.

²² Ibid., pp. 12-19.

²³ Ibid., p. 21.

²⁴ Loc cit.

私たちの信仰と福音の伝道の間違いなく中心にあるのがキリストの十字架である。教会がその召しに忠実であるならば、私が既に主張したように、教会はキリストのその特異性に集中しなければならず、さらに、苦しみを受け、甦られた主として、御自身の福音を身にまとったキリストに集中しなければならない。私はそう確信する。キリストの贖罪の犠牲において示され、遂行された神の救いの愛という福音を通してこそ、教会の命も信仰も、私たちと共なる存在となるための、神の御子の受肉の行為に根ざしていることに気づかされる。墮落し、呪われるべき私たちの状態を、また私たちの死を、キリストは御自身による裁きの場に置かれる。キリストは、受肉と十字架において、私たちの内側の深淵に潜む人間の悲惨さと破滅にまで入ってきてくださり、私たちの立場を御自身の立場として引き受け、私たちのためにとりなし、御自身を私たちの身代わりとし、そして、私たちの力ではどうすることもできない贖罪による回復を整え、そうすることで、私たちを聖霊において、神に愛される子どもたちとして、神と和解させてくださる。この事実を、私たちはあらためて強調しなければならない。私はそう確信する。

そこで、この点を説教する際、受肉と贖罪における、死と復活における、キリストの身代わりの人間性 (*vicarious humanity*) に思いを集中させることが、今日の私たちにとってとりわけ重要なことである。私はそう確信する²⁵。

次にトーランスは、キリストの「人性」を考える上で、パウロの言葉「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子の信仰によるものです」(ガラテヤ2:20)を引用して論考を展開する。新共同訳聖書はここを「神の子に対する信仰」と訳し、信仰対象としての位置づけに限定するが、ここは神の子キリストを所有格として「神の子の信仰」と解釈することのできる個所であり、トーランスはとりわけ、後者の「神の子の信仰」の意義を重視する²⁶：

「神の子の信仰」とは、ここでは単にキリストを信じる私たちの信仰としてだけでなく、キリスト自身の信仰として理解されるものである。なぜなら、それは根本的に、キリ

²⁵ Ibid., pp. 23-24.

²⁶ この点について、トーランス『キリストの仲保』の204頁で、訳者の芳賀力が、この解釈はK・バルトが『ローマ書講解』の中で示したものである点を指摘している。ただし、この解釈はハバクク書2章4節に由来し、この解釈は死海写本の中から発見されたハバクク書注解でも、この解釈が裏付けられ、さらにアタナシオス、カルヴァン、そしてバルト等、歴代の正統主義神学者たちがこの解釈を採用してきたことを、トーランス本人が解説していることを指摘しておく。T.F. Torrance, 'Preaching Jesus Christ', *A Passion for Christ* (Handsel Press, 1999), p. 25. を参照。

ストの揺るぎない信仰深さ、そして、私たちが包み、私たちを支えるキリストの代理的かつ犠牲的な信仰について語っているものだからである。それゆえ、私たちが信じる時には、たとえ自分たちの信仰という行為においてさえも、私たちはパウロと共に「私ではなく、キリストが」と言わなければならない。…（中略）…キリストを信じる信仰には、キリストの信仰と私たちの信仰とが両極となるような関係が含まれ、その関係の中で、私たちの信仰はキリストの揺るぎない信仰によって保たれ、包まれ、支えられている。…（中略）…その両極となる関係において最も重要な極は間違いなく神の信仰、あるいはキリストの信仰である。なぜなら、キリストは私たちを保ってください、私たちを御自身との生き生きとした関係の中に連れて行ってくださる信仰深いお方だからである。しかし、このような関係に包まれる中で、第二の極が信仰者の信仰、すなわち信仰者の応答的な信仰である。だが、信仰という行為は、私たちをはるかに超えたもの、すなわち神からの賜物であり、神の信仰深さによって覚醒され、保持されるものである。「私ではなく、キリストが」というパウロの基本原理は信仰にも当てはまる。すなわち、「私は信じます。しかし、私ではなく、キリストが」²⁷。

トーランスはこのように述べ、人間の側の信仰という行為も、第一義的には「上から」賜るものであり、信仰という行為においても人間は究極的には無力で、上からの無条件の神の恵みによるものであることを強調する。そして、このことはキリストの十字架の贖罪を通して、最も明白なものとなる。トーランスが次のように語るとおりである：

私たちがあらゆる点においてイエス・キリストに完全に依り頼まなければならないほどに、また、ただイエス・キリストに依り頼む時にしか、私たちは本当の意味で自由に—「私ではなく、キリストが」、いや「私の内なるキリストが」—信じることはできないほどに、救いはただ神の恵みによることが根本的なものであることを、私たちは何度でも繰り返し学び直す必要がある。なぜなら、彼は私たちの立場に身を置くために人間として来られ、彼の人性において、また人性を通して、私たちの人性が根本から作り変えられ、そして私たちは真実に人間となり、そして真に自由に彼を信じ、彼を愛し、彼に仕えるようになるのである。このことが、十字架と復活のすばらしいメッセージである。

キリストは、自由に、自分自身を例外なくすべての人のための贖罪の犠牲にしてください、またこのことが、主によって私たちが説教するために遣わされる理由である、

²⁷ Torrance, *Preaching Christ Today*, pp. 24-25.

という事実に基づいて、私は神の恵みによる救いの無条件の本性を強調し続けてきたのである²⁸。

トーランスは、説教をめぐるこの論考を閉じるに当たり、次のように訴える：

神の力としてのキリストの十字架に、そして人間の知恵ではなく、神の力を土台とするような信仰に、関心を寄せようではありませんか。

この真理に強い関心を寄せることは、確実に、キリストを説教するための召しにおいて、今日の教会に極めて必要とされることである。私はそう信じる。このことは、私たちが、牧師、長老、執事たち、そして他の教会的なつとめを担う人々のつとめ（ミニストリー）において、さらに全ての教会員のキリスト者としての証しにおいて、はっきりと強調しなければならない中心的な真理である。…（中略）…福音は伝道的な仕方でも宣べ伝えられなければならない！そして教会およびその伝道の抜本的な刷新に向けて扉を大きく開き、道を指し示すのは、神の力としての十字架の宣教であり、そしてまた、人間の知恵ではなく…神の力の内に立つ信仰について教えることである。これぞ本当の知恵であり、使徒パウロが言ったような神の知恵であり、そしてこれこそ、今日において教会に連なるわたしたちが絶望的なほどまでに窮乏しているものである²⁹。

3 トーランスにおける説教

3.1 キリストへの集中 一何を語るか

以上では、トーランス自身がどのような説教を語り（1章）、また説教についてどのような見解を論じたのか（2章）をめぐる、本人が記したテキストを重視しながら概観してきた。はっきりしているのは、トーランスが説教について語る際には、説教を「いかに語るか」よりも、「何を語るか」という点が専ら強調されている点である。トーランスにとって、説教で語るべきは、イエス・キリスト以外の何ものでもない。彼にとって、説教とは紛れもなく「キリストを説教すること（Preaching Christ）」であり、説教とキリストとは結びついたものである。

トーランスは「どの時代の神学者にも、主要な仕事のひとつは、教会の説教を神の言葉の法廷の前に引き出し、新約聖書のメッセージと教えについて忠実な解き明かしとして、それが的確であるかどうかを検証することである。今日において福音伝道主義の気流が高

²⁸ Ibid., p. 29.

²⁹ Ibid., p. 30.

まる中であって、そのような仕方では、伝道的な宣教内容が吟味され、検証されることは大事なことである」と述べる³⁰。トーランスの視点において、とりわけ吟味され、検証されるべき要点は、キリストが福音的に正しく説教されているかどうか、すなわち、キリストが神と人の両性を全く損なうことなく、真に人となられた神として、「受肉、贖罪、復活、高挙」の統合的なキリスト論において、説教されているかどうかである。2章でも取り上げた引用にも記されていたように、トーランスは別の書物で「説教とは、受肉と贖罪、死と復活におけるキリストの身代わりの人間性に焦点を当てることである。私はそう確信する」³¹と表現をやや変えて記し、説教が何を語るべきかのポイントを明瞭に告げている。トーランスにおいて、説教とは「身代わりの人間性」に集中しつつ、イエス・キリストを語ることに他ならない。

3.2 福音的説教 一いかに語るか

トーランスは説教の「方法論」についてはあまり多くを語らないが、『キリストの仲保』の中で「福音伝道の様式」について言及する箇所がある³²。そこにおいて、トーランスは説教の語り方の「福音的な方法」と「非福音的な方法」とを論じ、両者の違いを描き出す。まずトーランスが言う「非福音的な方法」という悪い例から見ていく。

神の自由な救いの恵みという福音は、本来、すべての人に注がれる無条件的なものであるにもかかわらず、説教者がそれを「条件付き」のものとして説教する語り方を、トーランスは「非福音的な方法」と呼ぶ。彼は次のように述べる：

現代の福音伝道において頻繁に見られるように、福音が非福音的な仕方では説教されるのは、説教者が以下のように告げる時である。すなわち、「これはイエス・キリストがあなたのために成し遂げてくださったことです。しかし、もしあなたがあなたの救い主キリストに対して、あなた自身の個人的決断をしないなら、あなたは救われませんでしょう」と。あるいはまたこう語られる。「イエス・キリストはあなたを愛してください、十字架の上であなたのために命を与えてくださったのです。しかし、もしあなたが彼に心を向けるなら、その時だけ、あなたは救われるでしょう」。

そのように語られる場合、人々の心に届くものは無条件の恵みの福音ではなく、いささか異なる福音、すなわちイエスにおいて実際にそうである福音の本質と内容を誤って伝える条件付きの恵みの福音である。…（中略）…そのように条件付きの律法

³⁰ Ibid., p. 7.

³¹ T.F. Torrance, 'Preaching Jesus Christ', p. 24.

³² トーマス・F・トーランス『キリストの仲保』、192-205頁を参照。

主義的な仕方では福音を説教することは、最終的に救いの責任が神の小羊の肩からは降ろされ、責任はすべて彼ら自身にあると哀れな罪人たちに告げる効果を及ぼすことになる³³。

「非福音的な方法」で語られる説教は、本来「無条件」であるべき神の福音が「条件付き」なものとして語られることであり、それによって、説教で語るべき本来の福音が会衆に誤って伝えることを、トーランスは危惧する。このような非福音的な説教に対し、教会で語られるべき説教は「福音的な方法」で告げられる、福音的な説教でなければならない。トーランスはこう述べる：

では、福音はどのようにして純粹に福音的な仕方では説教されるのだろうか。間違いなくそれは、私たちのために自由に無条件に提供してくださった神の救いの愛に対する人間のあり余るほどの応答として、イエスの身代わりの人間性に、十分に中心的な場所が与えられるという仕方においてである。その時、私たちは福音を福音的に説教し、教えることになる。… (中略) …こうして神の無条件の恵みの福音を無条件の仕方では説教するということは、神がイエスの身代わりの人間性において私たちのために自由に提供してくださった事柄についての、この驚くべき良い知らせを人々の前に差し出すことである³⁴。

説教が福音的な方法で語られるために、トーランスは先ほど強調したように、仲保者としてのイエスの「身代わりの人間性 (vicarious humanity)」の位置づけが重要である点を改めて強調する。

福音的説教において語られるイエス・キリストは、その人格 (person) において神性と人性とが完全に統合した、神と人間とを和解させる「仲保者」である。説教が福音的であるためには、受肉から、贖罪、復活、そして高挙に至る統合的なキリスト論からキリストを捉えなおし、人間に注がれる神の自由な無条件の愛が、この「仲保者」を通して、「仲保者」において、無条件に備えられていることが、会衆に告げられなければならない。それがキリストによって人間に示される福音である。イエス・キリストはこの福音への応答 (すなわち「信仰」) を求めている。それは、自分を捨てて、自分の十字架を背負って私に従いなさい、という弟子志願者たちへの招きにおいて明確に示されている³⁵。福音への応答は救いの「条件」ではない。寧ろ、「誕生から死に至るまでのイエスの全生涯と活動を、

³³ 前掲書, 193-194 頁。

³⁴ 前掲書, 195-197 頁。

³⁵ 前掲書, 192 頁。

神が自由に無条件に私たちに提供して下さった、ご自身に対する人間の応答の身代わりをなすものとして考えるべき³⁶であり、「身代わりの人間性」における「キリストの信仰」によって、神への応答は既になされている。したがって、会衆が安心してキリストに委ねてよいことに気付くような福音的説教が語られるべきである。

4 ま と め

4.1 トーランスの問題意識

トーランスは自身の説教集をはじめて出版する際に、序文の中で現代における説教の問題点を次のように指摘する：

大きな憤りを引き起こす現代の説教には、次のような諸々の局面がある。人気のある説教者に付きまとう誘惑は、自分の個性に基づいて会衆の信仰を形成しようとしたり、現代の文学について自分の知識をひけらかしたり、福音の中身によってではなく、その時代の様々な病理現象の診断書を提示し続けることによって、自分の民を養おうとしたり、キリストにおける神の力強い御業の福音を福音の中心から締め出すことを、ある実存主義者に許してしまい、さらに、その民にキリスト論の代わりに人間論を提供したり、キリストの教会におけるキリストではなく、代わりに教会について説教したり、さらには、受肉、贖罪、復活、高挙、それにアドヴェント（待降節）の代わりに、人間の伝統を会衆に提供する、といったものである。吹雪の中で道に迷った一匹の羊は、自らの毛を食べて、少しばかりは命を長らえるかもしれない。しかし、教会はキリストの体と血の代わりに、自分たちの経験や会議などを食べて生き長らえることなどできない。…

神の言葉は、実に頻繁に、福音そのものに由来しない、人間が作り出した「福音的な伝統 (evngelical tradition)」、しかも御言葉の重要な要素をまったく無意味にすることしか成功していない「福音的な伝統」の決まりごとや技術に雁字搦めにされている³⁷。

ここに、現代の説教者に対して向けられるトーランスの厳しい批判がある。彼は説教者が会衆に何を語り、会衆にどのような糧を与えているのかを問うのである。

本論文は、実践神学の主要課題である「説教」の観点から、これまでトーランスが説教について記したものと説教に言及したものに光を当てて考察してきた。特に、彼が 27 歳

³⁶ 前掲書、166 頁。

³⁷ Torrance, *When Christ Comes and Comes Again*, pp. 8-9.

の時に牧師招聘選抜の機会で語り、その後、加筆修正された説教原稿を分析し、それに次いで彼の「説教論」を考察するという順を経たが、彼の説教論に即して、もう一度彼の説教原稿に目を向けると、「新しく生まれる」すなわち「信仰に生きる」ということは、受肉と十字架と復活における仲保者イエス・キリストの御業において、神が自由に「上から」無条件に与えてくれる恵みである点が鋭く告げられているのが分かる。

トーランスは、受肉から、贖罪、復活、そして高挙に至るまでの総合的な観点からキリストを捉えて、キリストの身代わりの人間性を、説教の中心的な位置に据えることを強調する。しかもそれは、1957年の最初の説教集の序文で言及した問題意識であり、90年代までそれは一貫している。福音的説教とは、説教の中で「受肉」や「十字架」、「復活」の語を、お題目のように使用していればよいというわけではない。受肉を語る時、十字架を語る時、また復活を語る時に、「身代わりの人間性」として示される総合的な「キリスト論」の認識のもとで、宣教的に熱く、そして教示的に冷静に、さらには福音的に、説教者はキリストを語る必要がある。

4.2 「教会への緊急要請」

実践神学の領域を扱うトーランスの書物には、幾つもの重複や繰り返しが見られる。しかし、裏を返せば、その重複や繰り返しにおいてトーランスが何度も指摘するポイントは、彼の明白な危機意識の表れであると言える。

トーランスは1976年にスコットランド教会の総会議長に選出された。その年、彼は総会議長として「教会への緊急要請」と題した書簡をすべての教会に送っている。この書簡には、教会の現状に対する彼の危機意識が明瞭に表れており、そこでは説教についても言及されている。彼はこの書簡で次のよう綴っている：

イエス・キリストと彼の福音が、教会とその生活、その考え方、その活動のすべての中心に取り戻されなければならない。なぜなら、イエス・キリストは、神の受肉的自己啓示の唯一の源泉であり、父なる神への唯一の道、救いのための唯一の土台、また教会の唯一の土台にして唯一の規範だからである。イエス・キリストの霊だけが、教会に活力を与え、教会を新たにし、そして教会をキリストと共に生きる一つの体とすることができる。

聖書を通して伝えられるイエス・キリストと彼の福音の真理は、説教と教会の教えの中で、正当な場所に位置づけられなければならない、また教会の考え方や教会のあらゆるレベルでのつとめを清め、統合する上で、教会の神聖な権能と権威を行使することができるようにしなければならない。

宣教や伝道は、ただ優先課題として位置づけられるだけでなく、教会の礼拝と生活と活動のすべてにおいて、支配的な位置づけが与えられなければならない。スコットランドの再・福音伝道化は、何が何でもなされなければならない。苦しみを受け、そして甦られたキリストが人々に伝えられるのは、とりわけ、現在行われているパリッシュでの通常の福音伝道においてである³⁸。

今日、教会で語られる説教に対し、トーランスが抱く危機意識は「イエス・キリストと彼の福音の真理」が語られていないという点に集約される。それゆえ、それらを説教に取り戻すことが「教会への緊急要請」として提起されている。この要請は当時のスコットランドの諸教会に向けられたものであるが、今日の日本の説教者たちもこの要請に耳を傾け、そしてトーランスの説教論を受け止めながら、主日毎に語る説教を真摯に検証していく必要があるだろう。

³⁸ Internet-website : <http://www.tftorance.org/call-to-kirk.php> より。